

兵庫縣の養蜂植物(後)

三 木 順 一

6 月

上旬から約1カ月クリが流蜜する。主産地は氷上郡・佐用郡・有馬郡などであるがこれも年切れの傾向がある上、梅雨期なので期待はもてない。それに近年クリタマバチの被害を受けて以来この蜜も珍しくなつた。この蜜は黒く、かつ渋味があり食用にならないが、ミツバチの越冬用飼料として利用される。この流蜜期にはシイの時と同じく、巢内には精液臭がある。上旬開花し流蜜するものに前々号でのべたクロガネモチ・ソヨゴ・ナナミノキ・ウメドキ・イヌツゲなどがあり、ウツギ・イボタ・ネズミモチ・ナワシロイチゴ・シロツメクサ(クローバー)も良蜜を分泌する。モチノキ科以外のものは量は少く殆ど採蜜できない。クローバーは北海道・北米・北欧等では1斗もとれる大蜜源であるが日本本土では1ヶ月以上も咲いているのに全く蜜はとれない。北地に比べ昼夜間の気温差の少ない為と言われているが詳細はまだ判っていない。ニンジン(1カ月)・クスノキ・センダンも咲き始めるがミツバチの訪れは殆どない。クスノキは北九州では樟脳臭い蜜がとれたという報告がある。センダンも大木一面に咲いていてもミツバチを見ない。この頃の蜜源は樹木が多く且開花期間が短い(1週—10日)ので、調査や判定に期を失する事が多く、全国でも未尚不明のものが多数ある。

中旬にはサカキ・シンジュが開花しミツバチの訪れをみる。後者は特有の悪臭を巢内に漂わせるのですぐ判る。キウリが1カ月以上咲きよい蜜源になるが採れるほどではない。タマネギも咲き始める。この蜜はネギ同様タマネギ臭くても放置すれば無臭となる。採種地では、かなり蜜がとれる。ハゼもこの頃約1週間咲く、よくミツバチが訪れるが量が少ない。久留米附近では相当量の良蜜がとれる。

下旬に咲き始めミツバチの好むものにケンボナシ・カラスザンショウがある。前者は大木があれば良蜜がとれる。ナンテンも咲き始めるがミツバチは全く訪れない。

7 月

今月から8月末まで一般平地では巢内の経済は赤字である。上旬咲き始めるものにシナノキ・ボダイジュ・ムクロジ・カボチャ類・アカメガシワ・トウガラシ・センノキ・ヒマワリ(50日)・キササゲ・サンゴジュ・ツユクサ(100日)などミツバチの好く種類は多い

が、春に比べ何しろ量が少ないので、県下では蜜のとれる地方は全くない。かつて昭和20、21年頃東京や神戸の旧市内でカボチャの赤い生臭い蜜を5升も1斗も採つたなどというのは昔語りとなつた。網干附近にかなり栽培されていたがもう量も少なくなつた。各地でカボチャ畑がスイカ畑に変つたがスイカは大した価値がない。シナノキは北海道では内地のトチに相当する第一の蜜源樹であるが県下には大木が少ない。センノキも北海道には大木が多く緑色の蜜がとれる。これらの大木も県下では知らない。

中旬から下旬にかけてミツバチの訪門を受けるものに、アオギリ・ゴボウ・ツタ・ミソハギ・スイカ・ヤブカラシ(2カ月間)・ヒトツバハギ・ドウモロコシ(花粉だけ)・モツコクなどがある。この頃咲くものは前月に比べ開花期は稍長い、アオギリ・ツタ・モツコクは短く10日前後である。ネムノキは美しく咲くが価値はない。ヤブカラシは都市に多く困つた雑草であるが、多い所では芳香ある黄色い蜜をとる事ができる。

8 月

上旬最も盛んにミツバチの訪れるものにカボチャ(中旬まで)があり、その他にクマヤナギ(50日間)・ゴマ・ヘチマが咲き始めるが、いずれも量少なく蜜は貯えられる程でない。クサギが目立つた色の花を約1ヶ月開いているが、全くミツバチを見ない。全国の報告も同じである。

中旬にはダイズ(2週間)・リョウブ・ホツツジが咲き始める。西六甲のリョウブはなかなか豊富なもので蜜がとれると察しているが、誰もこの蜜を採つたものはない。この蜜は人間には無害だが、この花にかかると働蜂が漸次死んでいくという報告が長野県から出ており、今尙贅否種々で詳細は研究の要がある。ホツツジは蜂仲間では誰知らぬ者ない毒蜜源で、中部地方・東北地方に多く、この蜜はミツバチには害はないのに人間には有害である。食匙1—2杯でめまい、嘔吐、手足のしびれなどきたすが死亡例はない。近畿地方には今まで報告はないが、安栗郡興谷村の古老の言では8月下旬山の蜂(日本固有のミツバチ *Apis indica* var. *japonica*)の蜜を食うた者は中毒して倒れて動けなくなり、担いで帰つた事があるという。症状を聞くとこの蜜らしいし、現在まで日本で報告されている毒蜜源であるトリカブトでもタバコでもアセビでもな

い。しかもホツツジは山頂附近に多くみられる。毒蜜は外国でも2、3種あり、アメリカのあるゲツクイジュの類では子どもの死亡例さえあるという。ダイズはアゼマメと称して水田畦に豊富に栽培されるが訪花は極めて稀で、報告は殆どない。然るに本場の満州、北海道、それに近年大量に耕培し始めた米国では淡黄色の上蜜を豊富に採っている。これもクローバー同様気温差によるものか、なんとか究明し、また品種改良でもしてダイズから蜜がとれるようにしたいものである。渓谷ではツリフネサウが咲き始めよくミツバチを呼ぶ。この盛夏の最中近年都會の戦災跡を第1にキク科・ヒユ科・アカザ科などの帰化植物が種類も量も多く整っているがこれらは殆ど価値がない。(編者いう、戦災後数年でまた元の状態になつてしまう。灰分に影響されるためであろう)。ヒメムカシヨモギやヒメジョオンにミツバチが行つているが、如何でしようと蜂友から質問を受ける時があるが、こんなものに行くようではいよいよ蜜源がない印だと答えている。

下旬咲き始めて価値のあるものはヌルデ・タラノナ・イネなどである。イネは9月上旬が最も盛んであるが、午前10時頃から午後2時頃まで濃汚黄色の花粉が多量に撒び込まれる。これは葯も一譜につけて来るのでよく判る。殆ど周囲水田の筆者の蜂場でミツバチはどういうものか近くの水田に行かず、1000-2000m位の所へ花粉集めに行つているのをみる。イネは風媒花であるが蜂仲間では虫媒花でもある。ヌルデはクリと同じ蜜がとれるという報告があるが、筆者の奥谷村に於ける観察では濃黄色の不味い苦味のある蜜である。奥谷村ではかなりとれる。

9 月

今月に入るとミツバチの活動はめざましくなり、所によつては少し蜜が入り巢内は黒字となる。利用されるものは、イタドリ・イネ・ウド(約80日咲く)・シソ・シオン・ツルボ・ニラ・タラノキ・ミカエリサウ・ヌルデ・ハギ・ヨメナ類・キツネノマゴなど。後2者は開花期最も長く80日以上も続く。イタドリは臭い褐色蜜がとれるが採集する程ではない。ハギはヤマハギが主で、北海道や米国(日本よりの輸入)では良蜜がとれるというが、関西では少し花粉を集めて行くだけである。中国山脈の高冷地では平地より少し価値があるらしい。ウドの蜜は巢内で結晶する事があり、味は甚だ不味い。この月の花は何れも花期が長く3週間以上も咲くものが多く、利用価値は大きい。センダングサもよく訪れており、モヨギも風媒花でありながら、花粉は利用されている。ソバは北海道や鹿児島県など多栽培地では臭い褐色蜜が分離出来る位とれるが、県下では栽培も少なくまた訪れているのをみるこ

とも稀である。

中下旬ヒガンバナが畦、山麓一面に咲くがこれは全くミツバチを見ない。下旬ミヅソバ・キツタ・リンボクが咲き始める。キツタの蜜が入る時は巢門の前に特有の臭気がある。蜜の味は良い。

10 月

今月は9月中下旬からの花がまだ咲き続いており、咲き始めるものにはコスモス・ナワシログミ・ナギナタコウジュ・アキノキリンソウ・モクセイなどがある。前4者はミツバチの好む花であるが、不思議にもモクセイはあの芳香をもちながら全くミツバチを見ない。殆ど全国の報告が同じである。ナギナタコウジュは北海道や満洲では10月の唯一の大蜜源で、特有のハツカ臭い良蜜を得られるが、関西では全く価値がない。筆者は関西では量が少ないのではないかと、当地のと北海道からのと両方各々1畝ばかり2年栽培してみたが、稀にミツバチを見る程度で、その畑の中の唯一本のシソの方が遙かにミツバチの訪れの多いのを見て落胆した。アメリカのベレット養蜂植物試験場エナギナタコウジュを送つた処この草は良蜜源として写真入りの報告さえ出ている。

中下旬咲き始めるものに、チャ・ヤクシソウ・ラツキヨウ・シロダモ・サザンカなどがあるが、利用されても量が少なく大したことはない。

11 月

ミツバチの活動は次第に衰えるが、まだ10月中下旬の花は咲いている。ヒイラギ・ビワ・ヤツデ・リュウノウギクなどが咲き始める。ビワは淡路島西岸が日本で第3の産蜜地であり名高い。ビワは年切れがあるが、条件よければ、1群から数升とれる。この蜜はサクラと同じ色味で、赤味ある黄色、味は2級に属する。但しこの花にミツバチをみかけると働蜂が著しく減じ、弱群となるので、あまり推奨出来ない。この土地もミカンの場合と同様ミツバチ有害説を唱える馬鹿な指導者がいて入地し難い。或る年には入地税をとつたことさえある。ビワの花は1月上旬まで咲いている。

こうしてミツバチは越冬に入るが、決して冬眠するのではない。寒中でも気温が13°C以上に昇る日があれば、何か花を求めて野外を飛翔している。

以上大体ミツバチと関係深い植物をのべてみたが、この方面の研究は外国に比べて研究者が少なく、また大学でも研究所でも試験場でも手をつけている所はない。養蜂家の中僅かの植物好きの者が調べているだけで、まだまだ不明のものが多し。同好の士の1人でも多からんことを望む。(p.36へ)

(p.38から)

参 考 文 献

関口 喜一：日本の養蜂植物（昭24）

井上 丹次：蜜源植物綜説（昭29）

月刊ミツバチ（昭24. 4-昭29. 8）

F. C. Pellett : American Honey Plants (1947)

D. Hodges : The Pollen Loads of the
Honey Bee (1952)

American Bee Journal (vol. 92-93)

三木 順一：クロガネモチとその流蜜について
(兵庫生物 vol. 2 No. 3)